

〈送信者〉

財団法人 四万十川財団

TEL : 0880-29-0200

FAX : 0880-29-0201

E-mail: office@shimanto.or.jp

URL: http://www.shimanto.or.jp

米作りへの情熱“いごっそう”を貫く！「やりゆうがぁは、百姓じゃ！」

清流通信読者の皆様、こんにちは。

土佐の言葉に『いごっそう』があります。国語事典にも載るこの言葉は、既に全国区のようなのですが、つまり意味は、頑固で一徹。一つのことにこだわりを持って生きる土佐男へのいわば『敬称』なのです。今月は上流域中土佐町大野見から、米作りに対してはまさに『いごっそう』、昔ながらの方法で米作りを続ける南部治秀さんの話です。

◆ 伝統的な日本の農業、循環型農業 ◆

昔の日本の農家には、牛や馬がいて耕耘機代わりに田畑を耕し、また鶏や牛などの家畜の糞は堆肥となり土壌を作る有機肥料として用いられてきました。そこには無駄なものはいっさい存在せず、全てが自然界の食物連鎖に基づいて効率よく循環するシステムがありました。

しかしながら近年、便利な化学肥料の登場とともに、堆肥作りからの稲作に取り組む農家はほとんど見られなくなりました。

◆ 今なお、昔ながらの方法で、循環型農業に取り組む ◆

全長 196km 四万十川の源流点から下ること 27km。四万十川が谷川から大河へとその姿を徐々に変えつつある地点中土佐町大野見三ツ又に、今回お訪ねした南部治秀さんの水田は広がっています。何十年もの間、牛を飼い自ら堆肥を作り、それを使って米・野菜を栽培しているという南部さん。

取材に伺ったのは、9月のはじめ雨上がりの午後。「農業のお話を伺いたいのですが」と切り出すと、のっけから「農業みたいな仰山なことはしてないき。やりゆうがぁは、“百姓”じゃ！」ニコニコと満面に笑みをたたえながら、この道 50 年以上の南部治秀さんは、その『南部方式』とでも呼びたいような独自の循環型農業について語って下さいました。

◆ 米作りに対する強いこだわり ◆

南部さんの家では、ご自宅から少し離れた山の中に牛舎があり、現在 12 頭の黒牛を飼っています。この牛は肉用牛と言うよりも堆肥用牛で、ここで毎日出る牛糞とオガ屑や籾殻・米ぬか・落ち葉・サトウキビ殻等を混ぜてねかせ、堆肥を作っています。発酵してサラサラの土状になったそれは、においもほとんど無く、いかにも作物を育みそうにチョコレート色に輝いています。

「田んぼには、基本的に堆肥しか使わん。まず、稲刈りが終わったら、堆肥・ケイカル（カリ・リン酸を補う）をまいて耕作をする。他の化学肥料とかは一切使わん！土が出来ちゃったら（出来ていたら）病気も出にくい。」

その穏やかな表情から出る言葉は控えめではありますが、作る物に対する絶対的な自信・こだわりのようなものが感じられます。それにしても、この堆肥作りはかなりの重労働のようですが、一日たりとも休まず休めず、来る日も来る日も、文字通りの“益暮れ正月なし”の作業で、かたくなにまでこだわった『南部堆肥』で土を作り続け、米を作る、いわば、南部さんは米作りに対する『いごっそう』なのでしょう。

◆ そして環境を守ること ◆

また、自然界に存在しない化学肥料は、過剰になったものがそのまま川に流れ出て、環境汚染につながるということも見逃すことができません。昭和 50 年前の四万十川には『たまげるほどのウナギ・鮎がおった』らしいのですが、近年はその数が減少の一途です。南部さんはウナギ捕りの名人とか。「昔の四万十川にはウナギや鮎がいっぱいおった。大きな石を動かしたらゴソッとウナギが出てきた。いっぺん石の下に 7 匹もおって鰻箸で全部捕まえたことがある。」懐かしそうに、そうお話しして下さいました。四万十川と共に生きてきた南部さんにとっては、この川を汚す危険性のある化学肥料の使用は出来れば避けたいという思いも、あるのかも知れません。◆ ◆ ◆ ◆ ◆



『昔は大変だった』今だから笑って話せる



やがて実りの秋を迎える。

『昔からこうしてきたし、これが一番良い方法だと私は知っている。』南部さんの言葉一つ一つには、そういう、本当にやってきたという自信のようなものが感じられます。

帰り間際、ご自宅前の黄金色の実りの時を迎えようとしている稲穂を見つめる、穏やかな表情のご夫婦の横顔に、『実るほど頭を垂れる稲穂かな』の句が重なりました。



中土佐町

苦労の歴史などがい知ることができない穏やかな表情のお二人。



牛舎は南部さん作。何でも作ることが出来る



堆肥を作ってくれる牛



これが秘の南部堆肥！